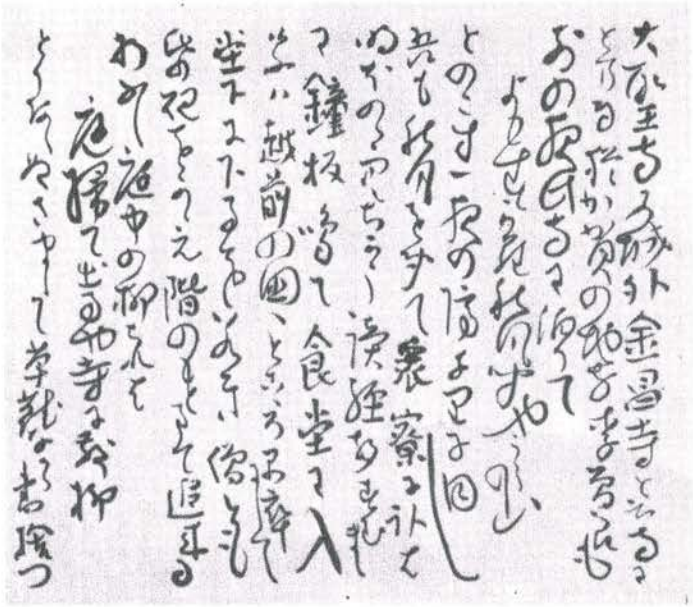


【金】

大聖寺の城外、金昌寺と云寺にとまる。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此寺に泊りて、

よもすがら秋風聞やうらの山

とのこす。一夜の隔千里に同し。吾も秋風を聞て衆寮に臥は、明ほの〻空ちかう、読経声すむまゝに、鐘板鳴て食堂に入。

けふハ越前の国へと、こゝろ早卒にして堂下に下るを、若き僧とも紙硯をかゝえ、階のもとまて追来る。折ふし庭中の柳ちれは、

庭掃て出るや寺に散柳

とりあへぬさまして、草鞋なから書捨つ。

【境】

越前のくに、吉崎の入江を舟に棹さして、しほこしのまつを尋ぬ。

よもすがら嵐に波をはこはせて

月をたれたる汐こしの松　西行

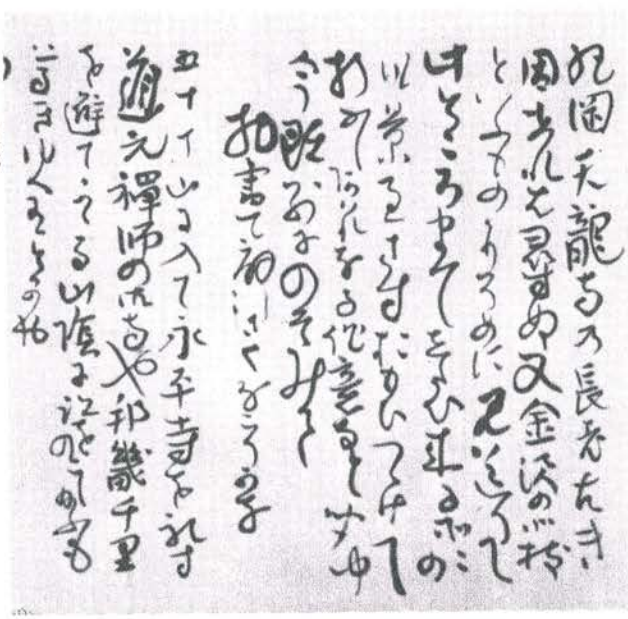
此一首にて数景盡たり。もし一弁を加ふるものハ、無用の指を立るかことし。

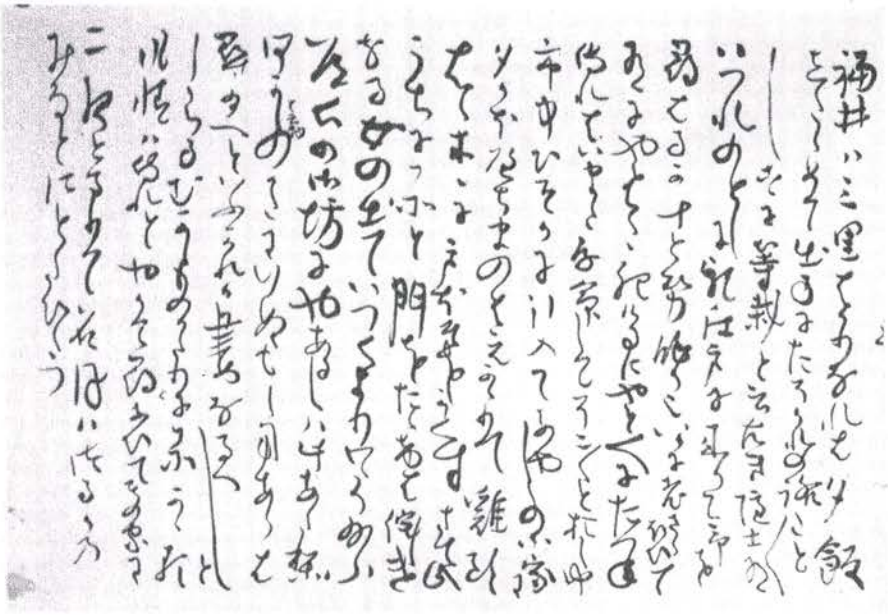
丸岡天龍寺の長老、古き因あれは尋ぬ。又金沢の北枝といふもの、かりそめに見送りて、此ところまてしたひ来る。所々の風景過さすおもひつゝけて、折ふしあハれなる作意なと聞ゆ。

今既別にのそみて、

物書て扇引さくなごりかな

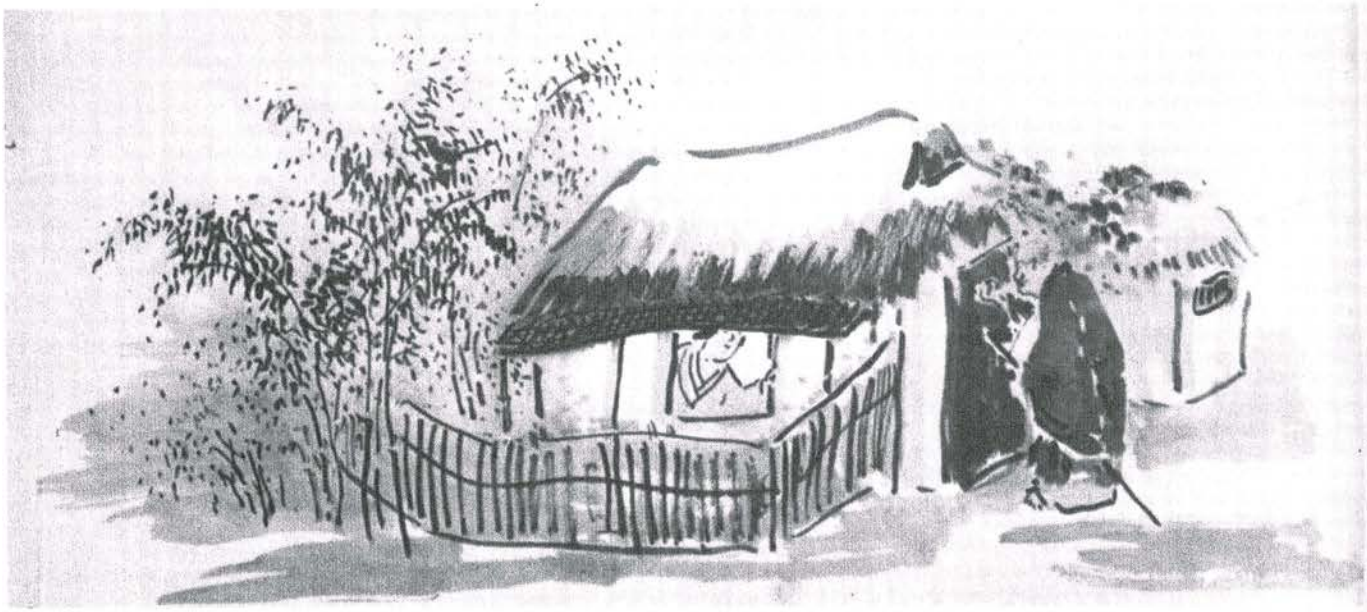
五十丁山に入て永平寺を礼す。道元禅師の御寺也。邦畿千里を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、尊きゆへ有とかや。

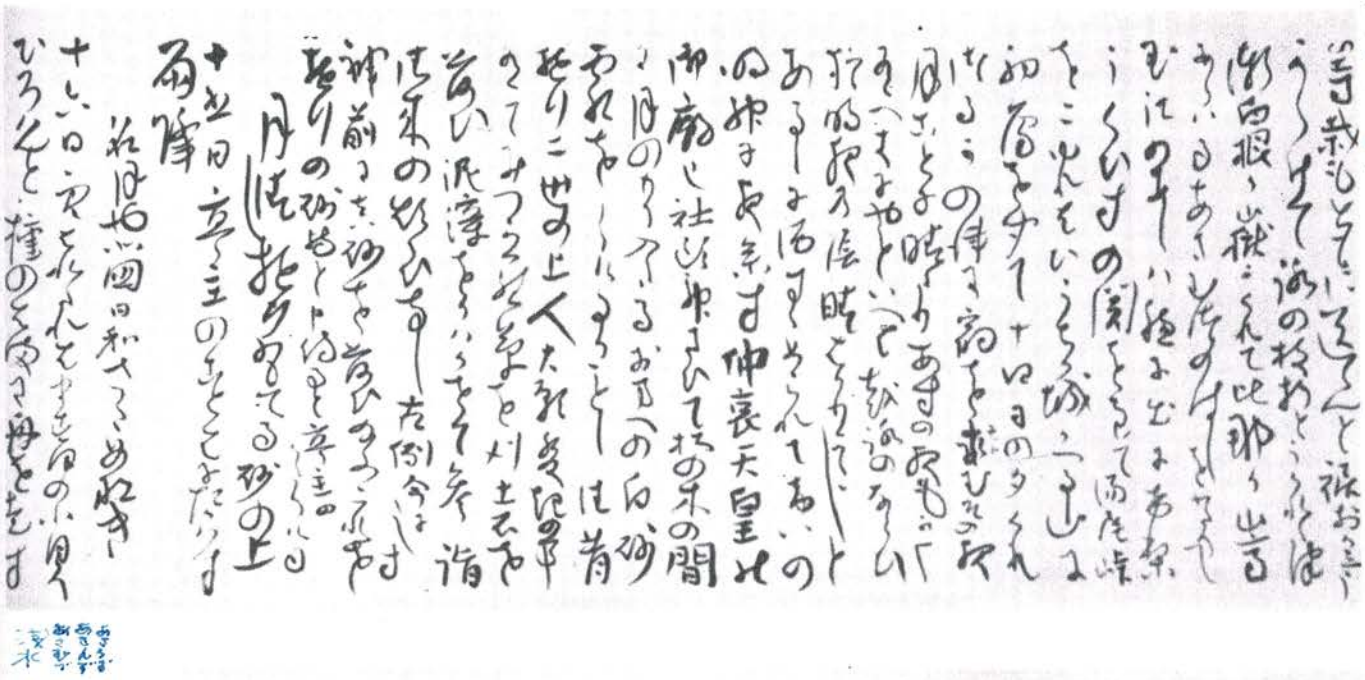


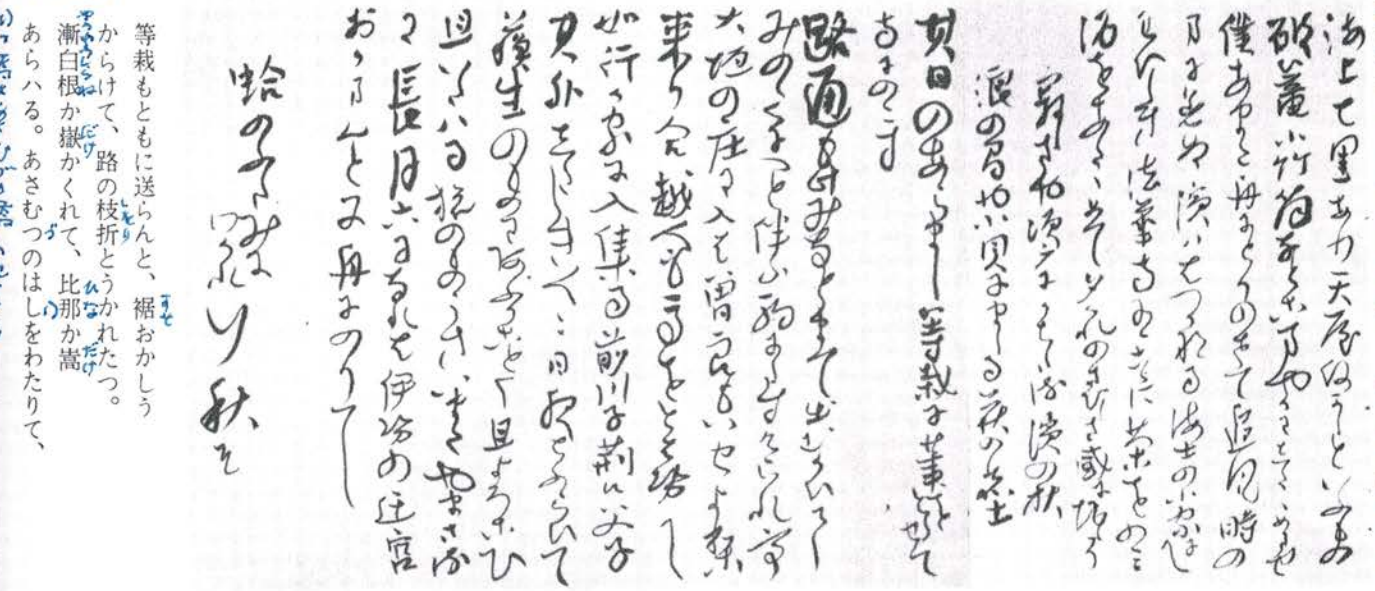


福井ハ三里はかりなれは、夕飯
したゝめて出るに、たそかれの路たと〳〵
し。こゝに等栽と云古き隠士有。
いつれのとしにか、江戸に来りて予を尋。
はるか十とせ餘り也。いかに老さらほひて
有にや、はた死けるにやと、人にたつね
侍れは、いまた存命して、そこ〳〵とおしゆ。
市中ひそかに引入て、あやしの小家に、
夕かほ・へちまのはえかゝりて、鶏頭・
はゝ木々に戸ほそをかくす。さて此
うちにこそと門をたゝけは、佗しけ
なる女の出て、「いつくよりわたり給ふ
道心の御坊にや。あるしハ此あたり
何かしと云物のかたに行ぬ。もし用あらは
尋給へ」といふ。かれか妻なるへしと
しらる。むかしものかたりにこそかゝる
風情ハ侍れと、やかて尋あひて、その家に
二夜とまりて、名月ハつるかの
みなとにとたひたつ。

『奥の細道』夕顔の巻







等栽もともに送らんと、裾おかしうからけて、路の枝折とうかれたつ。漸白根か嶽かくれて、比那か嵩あらハる。あさむつのはしをわたりて、

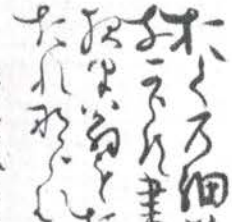
梢はあさむづの橋」（秋草子）

太陽暦十月十八日

大垣の庄に入は、曽良もいせより来り合、越人も馬をとはせて、如行か家に入集る。前川子・荊口父子其外したしき人々、日夜とぶらひて、蘇生のものにあふかことく、且よろこひ且いたハる。旅のものうさいまたやまさるに、長月六日なれは、伊勢の迂宮おかまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋そ

右奥細道上下二巻應維駒子之需写於洛下
夜半亭閑窓
于時安永己亥冬十月
六十四翁蕪村



寛政丙辰初冬
呉春識

右奥細道上下二巻應維駒子之需写於洛下
夜半亭閑窓
于時安永己亥冬十月
六十四翁蕪村

P50 芭蕉伝説の懐紙に

気比の海のけしきにめでいるの浜の色に初りてますほの小貝とよみ侍りしは西上人の形見成けらし。さればかの小はらは芭蕉その名を伝へて汐のまをあさり、風雅の人のこころをなぐさむ。ぷ寛年比見ひ浪りしに此たび武江芭蕉桃青必園の序。このほまにまうで侍る。同じ舟にさそはれて小貝を拾ひ袖につみ盃にうち入れなんどして假上人のむかしをもとはやす事になむ。越前ふくみ洞哉書。小敏ちれますほの小貝小盃。

桃青元禄二仲秋

1) 内に貝合せせんと せさせ給ひける人にかはりて

汐深むるますほの小貝ひろふとて色の浜とや いふにやあるらむ　西行

おくの細道を覚束
なからす書おほせたるハ
夜半翁をおきて　それ
たれならむ
寛政丙辰初冬　呉春識

逸翁美術館蔵

蕪村筆維駒本（上・下巻）

奥の細道画巻

〔上巻〕

月日ハ百代の過客にして、行かふ年も
又旅人なり。舟のうへに生涯をうかべ、馬の
口とらえて老をむかふるものハ、日々旅にして
旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。
予もいつれの年よりか、片雲の風にさそハれて、
漂泊のおもひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、
江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、
やゝとしもくれ、春立る霞の空に、
白川の関こへんと、そゝろ神のものにつきて心を
くるハせ、道祖神のまねきにあひて、
取もの手につかず。もゝ引のやぶれをつゝり、
笠の緒付かへて、三里に灸すゆるより、
松しまの月先心にかゝりて、住るかたハ人に譲り、
杉風か別墅にうつるに、

草の戸も住替る代や雛の家

面八句を庵の柱にかけ置。やよひも末の七日、
明ほのゝ空朧々として、月は有明にて光おさまれ
る物から、不二の峰幽にみへて、上野・谷中の花
の梢、又いつかハと心ほそし。むつましきかぎり
は宵よりつとひて、舟にのりて送る。千しゆとい
ふところにて舟を上れハ、前途三千里のおもひ胸
にふたがりて、
幻のちまたに離別のなみだをそゝく。

行春や鳥啼魚の目ハ泪

千住